

Main Text (The essay must be 1 page in English or Japanese)

Essay Title: All is well: How I overcame discouragement in doctoral program

なんくるないさー。

沖縄では良く使われる有名な言葉だ。僕の理解で、ざっと標準語に訳せば、「未来はなんとでもなるさ」くらいの意味である。

研究者の姿に憧れて、博士課程に進学したまでは良かった。

進んだら進んだでなんとかなるさと、自分の未熟さを棚に上げて、簡単に考えていた。

しかし、入ってすぐに現実を思い知ることになる。読まなきゃいけない専門書はただでさえ分厚くて難しいのに、英語で書かれている。自分の研究内容を説明しても理解されないことも増えた。予想した結果がでることはほとんどない。行き詰る。自分の限界を否応無く突きつけられる。

このままでやっていけるのだろうか。

気付くと足が止まってしまい、将来のことを悩んでいる自分がいた。

ちょっと前に書いたあの論文は査読を通るのか、就職はできるのか、もしかしたら自分は社会に必要とされていないんじゃないか。そもそも卒業はできるのか。全てのことに自信がなくなり、自分がやりたかったことが見えなくなった。キャリア構築なんて考えている精神的な余裕はない。

不安に潰されて、何も手につかない日々が続いた。

将来に対する不安に耐えられなくなった僕は、ある日、実家のある沖縄に逃げるように帰った。

突然帰ってきた息子に両親は驚きつつも、ゆっくり休みなさいと言ってくれた。

実家に帰ってしばらくした頃、母がふと話し始めた。

沖縄には、「なんくるないさー」という言葉があるでしょ、と。

だが、このとき母の口から語られたこの言葉の意味は、僕が知っていたものとは、ちょっと違っていた。

この言葉には、隠れた枕詞が存在していたのだ。

「どんなにつらいことがあっても、今ここで、努力していれば」。

今ここで努力をしていれば、未来はなんとでもなるさ。

戦争で全てを焼かれ、多くの親族や住む家を失った沖縄人が、それでもポジティブに頑張り、沖縄をここまで復興させることができた理由がこの言葉に表れている気がした。

未来像に囚われてばかりで今を見失っていた僕に、母はこの言葉を通して今何をすべきかを教えてくれた。

なんくるないさー、あまり将来のことを不安に思ってもしょうがない。

大切なのは、今ここに集中して、そこで頑張ること。そうしていれば「未来はなんとでもなる」。悲観することはない。

足が止まってしまっていた僕だが、今では研究に加えて、インターンシップや海外遠征プログラムなど、様々なことに挑戦することができている。後ろを振り返れば、よちよち歩きではあるが、自分の成長に気付く機会も増えた。研究自体は相変わらず上手く行かないことばかりだが、努力しつづければ、きっと良い結果がでるだろう。

なんくるないさー、この言葉が今日も僕の足を進める。